特集 台頭するコロンビア

長いトンネルを抜けるコロンビア―希望の21世紀へ

二村 久則

はじめに

21世紀を迎え、チャベス左翼政権が誕生したベネズエラ、制度的革命党（PRI）の70年以上にわたる一党支配が途絶えたメキシコ、経済危機に沈んだアルゼンチンなど、いくつものラテンアメリカ諸国が激しく変動している。そんな中で、ポジティブな方向に変化しつつある国の代表格としてコロンビアを挙げることに異論は出ないであろう。1980年代から90年代にかけて、麻薬組織の跳梁と反政府ゲリラによる武装闘争で「危険な国」のイメージが定着したコロンビアであるが、今や麻薬組織の傍若無人な活動は鎮圧され、政府と反政府ゲリラとの間では和平交渉が開始されている。長く暗いトンネルを抜け、平和を取り戻そうとしているこの国は、外国人観光客も飛躍的に増加し[1]、外国からの投資が活発化して[2]経済的にも安定した発展の道を歩んでいる。

国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会（ECLAC）が昨年12月に公表した予想によると、2015年のコロンビアのGDP成長率は4.3％の見込みで、これはラテンアメリカ平均の2.2％の約2倍にのぼる[3]。同国のGDP成長率は12年4.0％、13年が4.7％、14年も4.9％（推定値）なので、ここ数年のコロンビア経済はすっかり安定したものとなっている。経済協力開発機構（OECD）が本年1月に公刊した*2015 OECD Economic Survey of Colombia*では、「コロンビアは貿易と投資への開放を徐々に進めており、治安状況も改善しつつある。（中略）政府と武装集団間で最近開始された和平交渉は、何十年にも及んだ暴力の時代を終焉させるであろう」[4]と、最近のコロンビア情勢を評価している。

豪腕大統領アルバロ・ウリベ

長年続いた武力紛争が沈静化し、今日のコロンビアが平和への道を歩み始めたきっかけは、2002年から2期8年にわたって大統領を務めたアルバロ・ウリベ大統領の時期に求めることができよう。現在は上院議員となっているウリベ元大統領に対しては、アンティオキア県知事時代のパラミリターレス（右翼準軍事組織）とのつながりをめぐって訴訟の動きがあり、大統領時代の人権侵害に対する批判もあるが、泥沼化していた紛争を終結させる方向へ導いたのは彼の功績である。

ウリベが02年大統領選挙において大差で当選を果たした主な理由はつぎのようなものである。二人の前任者、すなわち1994年から98年のサンペール大統領、98年から02年のパストラーナ大統領のいずれもが、反政府ゲリラとの交渉による和平実現を公約し、それを果たせなかったばかりか紛争を一層激化させてしまったこと、そしてそれにもかかわらず、02年選挙に出馬した候補者の中で、ゲリラとの対決姿勢を明確に打ち出したウリベ以外のすべての候補者がゲリラとの対話の継続を訴えたことである。一言で言うなら、コロンビア国民はいつ果てるともしれない武力紛争にうんざりし、ゲリラ側に譲歩せずに紛争を解決してくれそうなウリベ候補を圧倒的に支持したのである。そしてウリベ政権は公約通りの成果を上げた。すでに第1次政権の4年間で、殺人件数、誘拐件数、テロ行為などの数字はいずれも50％前後あるいはそれ以上という大幅な減少を記録し、ゲリラやパラミリターレスなどの反乱武装勢力を脱退して投降した兵士の総数は4万5,000人にのぼる[5]。第2次政権期でも、最大手ゲリラ組織コロンビア革命軍（FARC）の最高幹部を次々と殺害し、組織を弱体化して交渉を受けざるを得ない立場に追い込んでいるし、パラミリターレスについては、政権期間中にほぼ解体を実現した。

一方、治安の回復とともに、海外投資を呼び込み、財政を再建して、90年代後半から低迷していた経済を再び成長軌道に乗せたこともウリベ政権の功績として特筆すべきである。

和平推進するサントス政権

憲法改正により3選を企てたウリベ大統領だったが、その望みは叶わなかった。代わりに後継者として彼が指名したのは、ウリベ政権下で国防相を務めた腹心の

フアン・マヌエル・サントスである。サントスがウリベから期待されたのは、ウリベ流の対反政府ゲリラ強硬路線の継続であった。2010年の大統領選挙で、ウリベ大統領の強力なバックアップを受けたサントス候補は、第1次投票でこそ過半数には届かなかったものの、決選投票では70%近い得票率で対立候補に圧勝した。ところがサントスは、大統領に就任するや、ウリベとは犬猿の仲だったベネズエラのチャベス大統領との関係を修復し、秘密裏にFARCとの和平交渉を準備したうえで、12年11月からキューバの首都ハバナにおいて公式に交渉を開始したのである。

これを見てウリベ前大統領は、サントス大統領を「裏切り者」と呼んで見限り、サントスが自分と同じように再選を狙った2014年の選挙では、ウリベ政権で大蔵・公債相を務めたエコノミストのスルアガを対立候補に指名してサントスの追い落としを図った。有力候補5人が立候補する混戦となった選挙戦最大の争点は、ゲリラとの和平交渉をめぐってであった。サントスを含む4人の候補がゲリラとの和平交渉を公約したのに対し、スルアガ候補のみが対ゲリラ強硬姿勢を主張した。第一次投票の結果はスルアガ候補が29.25%を獲得し、25.69%だった現職のサントス候補を抑えて一位となり、勝負は決選投票に持ち込まれた。決選投票では、サントス候補が50.95%と45%のスルアガ候補を逆転し、大統領再選を果たした。サントスは決選投票目前の6月に、国内第二のゲリラ組織「民族解放軍（ELN）」とも秘密裏に予備交渉を重ねており、近く本交渉に移行する予定であることを発表した。現職の利点を最大限利用したこうしたやり方には当然批判もあったが、国民の多数が支持する和平交渉にELNも加えることには大方の賛成が得られたものと思われる。サントス大統領は就任演説で、2025年までに「完全な和平」と「公平な社会」を実現し、ラテンアメリカで「最も教育水準の高い」国になるという政策の3本柱を示した。彼はまた、当選後の記者会見で明言したとおり、大統領再選禁止規定を含む「国家改革法案」を議会に提出した。ゲリラとの和平交渉推進と並んで、大統領への権力集中を緩和して少しでも紛争再発への芽を摘み取ろうとするサントス大統領の努力は評価されて然るべきであろう。

和平プロセス

上述のとおり、コロンビア政府とFARCはすでに2年以上にわたり、ハバナで和平交渉を継続している。FARCは最盛期の2000年代初めにはおよそ1万8,000人の兵力を保持していたといわれ、国軍・警察と国内各地で激しい戦闘を繰り返して、50年以上の間、コロンビアを内戦状態においてきた。ウリベ政権8年間の徹底した対ゲリラ強硬策によりその勢力は減退しつつあるが、それでもなお、国内11地方の242自治体に合計1万1,000人の兵力を展開している[6]。政府・FARC間の和平交渉は1980年代のベタンクール政権以来これまでにも何度か試みられてきたが、いずれも失敗に終わっている。

50年間で22万人が犠牲になったといわれる紛争に今度こそは終止符を打つべく始められた今回の交渉では、6項目が論点となっている。それらのうち、農地改革およびFARC成員武装解除後の政治参加という2項目については比較的スムーズに合意が形成され、また3項目目の麻薬取引に関しても昨年5月に合意が成立、FARCは今後麻薬取引を行わないことを約束した。まだ合意が成立していない2項目は、FARCの武装解除プロセスとその成員への処罰と恩赦、そして紛争の犠牲者に対する補償についてである。これらは昨年の大統領選挙でも最大の対立点となった厄介な問題で、議論がまとまるまでにはなお相当な時間がかかることが予想され、交渉当事者相互の譲歩と忍耐が要求される。また、ELNとの間でも、昨年、エクアドルとブラジルで予備的な対話が持たれたことが発表されており、和平へ向けての歩みは、遅々としたものではあるが着実に前進している。

日本との関係

最後にわが国との関係を見てみよう。日本とコロンビアは1908年に修好通商航海条約を締結しており、29年には最初の日本人移民がコロンビアに入植している。現在、日系人コミュニティの規模は約1,800名と比較的小さいものの、主に農業分野での日系人の貢献には顕著なものがある。今から7年前の2008年に両国修好100周年を迎えたのを記念して「日本・コロンビア賢人会議」が立ち上げられ、両国から産・官・学の代表が参加し、東京とボゴタで会議を開いてその結果を建設的提言としてまとめ、両国政府に具申した。「日本・コロンビア経済連携協定（EPA）」締結に向けて現在進行中の二国間交渉が開始されたのは12年12月であるが、その最初のきっかけは上記の建設的提言にある。なおこの交渉は、今年の3月にボゴタで第10回が行われたばかりである。

日本・コロンビア関係には最近大きな進展があった。昨年2014年7月の安倍首相によるコロンビア公式訪問である。コロンビアの大統領は何度も訪日しており、とくに最近3人の大統領はいずれも任期中に公式訪問している。これに対して日本の首相の公式訪問は、1世紀以上に及ぶ両国外交史で初めてのことで、歴史的な出来事と言える。安倍首相は公式声明の中でEPAの交渉を加速することを明言しており、いまだ解決すべき対立点は少なくないとはいえ、近い将来の協定成立が見込まれる。もしこれが実現すれば、両国間の経済関係のみならず、観光面での交流推進も期待できる。コロンビアは地理的には日本から遠いけれど、地理的、歴史的、文化的に多彩な魅力を備えた国なのである。

（ふたむら　ひさのり　名古屋大学名誉教授）

1 コロンビア旅行観光協会（ANATO）によれば、2013年にコロンビアを訪れた外国人観光客は約183万2,000人にのぼる。これは2000年の55万7,000人と比べて3倍以上の数字である。http://www.anato.org/index.php/investigaciones

2 コロンビア貿易投資振興機構（プロコロンビア）によると、2014年には62件の新規海外直接投資プロジェクトがあり、これは対前年比で11％の増加であった。http://www.investincolombia.com.co/news/774-procolombia-brought-62-new-investment-projects-in-2014.html

3 Procolombia　http://www.investincolombia.com.co/news.html?start=12

4 *OECD, 2015 Economic Survey of Colombia,* p.6.

5 二村久則『コロンビアを知るための60章』明石書店、2011年、116頁

6 Diariodeurgencia, 18 de Diciembre de 2013.

ラテンアメリカ参考図書案内

『銀嶺のアンデス －高橋是清のペルー銀山投資の足跡 La Primera inversión japonesa en el Perú 1889』

五味 篤著・馬場 勉編　MUSEO ANDRES DEL CASTILLO　2014年10月　221頁

蔵相・首相を務め、かの二・二六事件で亡くなった高橋是清が、19世紀に技師や抗夫をひき連れてペルーに赴き、銀山開発を試みていたことは、ほとんど世に知られていないだろう。本書は、鉱山企業に長く勤務するだけでなく、ペルーの滞在経験も豊かな著者が、日本の最初期の中南米鉱山投資の一部始終を明らかにした労作である。

明治の実業家であった高橋是清一行は、1889年8月に高品位の銀鉱脈の知らせを受けると、すぐに海路ペルーに渡り、翌年アンデスの標高4000メートル超にあるカラワクラ鉱山で活動を開始する。なぜ19世紀末にこのような鉱山投資が試みられ、そして可能であったのか。高橋是清はじめ、当時の関係者はどのような思いを抱えていたのか。最終的にこのプロジェクトは不調に終わるが、そのような判断は正しかったのだろうか。こうした問いに対して著者は、当時の文書や写真、関係者の手記や書簡を丹念にひもといて明らかにしていく。

本書全体を通じて、鉱山投資の実情を理解するために著者の専門性が発揮されており、余人をもって代えがたい豊富かつ専門的な知見が提供されている。また、日本語とスペイン語の二言語併記で執筆されており、両国の読者にとって面白く読めるものであろう。

〔岡田　勇　名古屋大学准教授〕

入手・問い合わせ先：
三井金属鉱業（株）経営企画部IR・広報室（PR@mitsui-kinzoku.co.jp Fax 03-5437-8029）
もしくは日本ペルー協会（andes@krc.biglobe.ne.jp Fax 03-3595-5598）へ。
いずれでも3,400円＋送料